

発表タイトル	うどん屋の看板
発表者所属名	日本歴史研究専攻 教授
発表者氏名	小島 道裕
<p>日本の近世初期風俗画には、「うどん屋」の看板がしばしば描かれている。横長の板の下に細長い紙をたくさん垂らした、言わばモップの先の部分のような形である。</p> <p>この独特な形状の看板は、絵画資料に江戸時代ごく初期すなわち 17 世紀初頭から表れ、京都でも江戸でもよく見られたようだが、江戸時代中期ころからは市中ではすたれて、街道筋の宿場の風物詩となったらしい。そのことは、柳亭種彦『用捨箱』（1841）のような近世考証随筆や、その系譜を引く坪井正五郎『工商技芸 看板考』（1887）にも記されている。</p> <p>この看板は、なぜ江戸時代初期に突然現れたのだろうか。社会的背景としては、都市建設が盛んとなり、大量の労働者や新たな人口の流入があったため、不特定多数を対象とする外食産業の需要が生じたことが影響していると思われる。市中の看板は、やがて文字を書いた行灯型のものになっていくが、それは当然識字率の問題とも関係しており、この独特な看板は、文字を解しない層にも食事を提供できる場であることを示す工夫であったとも見られる。</p> <p>ここで、うどん屋の看板自体の変遷を見てみると、初期のものは、板の幅が長方形ないし上部が丸い「楕形」で、垂らした紙は細く多いが、江戸時代中期頃になると、板は頭の尖った高札のような形になり、垂らした紙は幅広で数が少なくなる、という傾向が見られる。この変化は、最初に完成度の高い看板が国外から移入され、その後、国内で「和様化」していったと仮説的に考えることができる。うどんは元々中国起源の食べ物であり、具体的な経路は不明であるが、中国の「うどん屋（麵店）」の看板が、日本でも都市と外食産業が発達する時代になって使われ出したのではないだろうか。</p> <p>実際、20 世紀前半ころの中国（北京、満州）では、このような看板が盛んに使われていた。その起源をたどると、下部に吹き流しを付けた「酒旗」にたどり着くようだ。円筒状の物に細長い紙か布を付けた飲食店の看板は、明清時代の中国風俗画にも確認することができる。それは麵店というよりむしろ酒食を提供する店であり、おそらく、赤い提灯の下に小さな吹き流しを付けた今日の中華料理の看板につながる。そう思って見ると、絵画資料に見える日本の「うどん屋」も、扱っているのはうどんだけではなく、酒や酒屋とのセット関係が見られる。一見うどんの形状を模したかのような、そして当時もそう見られていたであろう糸状の部分は、どうも中国の「酒旗」の流れを汲むものらしい。</p> <p>ここで問題が残る。板に糸状の紙を垂らした日本近世のうどん屋看板や戦前中国の麵店の看板は、円筒状のものに糸状の紙を垂らした飲食店の看板から、いつどのように変化ないし分化したのか。そこがミッシングリングとして、まだ残された課題となっている。</p>	